

別紙 1 - 1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 高松 礼奈

論 文 題 目

Empathy and utilitarian judgment in sacrificial dilemmas

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎  
名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 金子一史  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 溝川藍

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、道徳的ジレンマにおいて、共感性が功利主義的判断をいかに影響するのかを検討した。具体的に、自らの判断によって、少数の人を犠牲にすることにより、多数の命が救われるジレンマを取り上げ、功利主義的な判断に共感性の無さが起因するのかを、一連の研究によって多角的に追究している。

第1章は、人道的な判断に対して、共感性の働きについての先行研究を概観している。特に、現状では特性的共感性についての研究が中心である一方、状況的共感性と、その生起の裏にある過程について十分に検討されていないことを主張している。本論文の目的は、どのような共感性が、どのようなプロセスを経て道徳的判断に影響するのかを明らかにすることを目的とした。

研究1では、共感性を2つのタイプに分けて、道徳的ジレンマ・シナリオに対する功利主義的な判断との関係を検討した。他者中心的共感性（共感的関心）と自己中心的共感性（個人的不快感）が、2つの道徳的ジレンマ（自己関与と第三者的参与）の判断にどのような影響を及ぼすのかに着目した。その結果、自己が関与しているジレンマでは両共感性が高い人は功利主義的な判断を避けていたことが明らかにされ、特性的共感性よりも状況的共感性が功利主義をより強く予測していることが明確にされた。

研究2では、道徳的ジレンマで犠牲になる人物に対する共感性を実験的に喚起し、功利主義的判断への働きを検討した。共感性をプライミングした条件のほうが、犠牲者に対する功利主義的判断は行われなかったことがわかった。共感性が高まれば、犠牲者に対する配慮が顕著となり、多人数を救うために犠牲にしない判断が下される傾向が確認された。

研究3では、共感性欠如、つまりサイコパシーおよびアレキサイミアの影響を検討した。その結果、いずれの特徴が高ければ高いほど、功利主義的判断を行うことが判明し、共感性が低いことが、多数の人を救うために一人を犠牲にすることに対するためらいと負の関係にあることが明らかにされた。

研究4では、功利主義的判断を行なったことによる罪悪感と、共感性との関係について検討した。結果は、サイコパシー傾向の高い人は、功利主義的判断に対して悔いを感じないことが判明し、自らの判断に対する反省を行わないことがわかった。

考察では、この一連の研究の意義について論じており、子どもの社会化において、共感性を育成することの重要性および道徳的観念や、社会的不条理を受ける人びとへの他者視点取得の重要性を裏付けていることにある。また、共感性のみならず、共感性の欠如であるサイコパシーやアレキサイミアの観点からも、共感性と功利主義的判断の関連性を探っていることから、従来の研究とは別の視点による問題へのアプローチを用いていることが特に目新しい点であることを訴求している。

## 論文審査の結果の要旨

以上、本研究は共感性と功利主義的判断を、道徳的ジレンマを用いて多角的に検討しており、多数の工夫を行っていることにより、国内外の同類の研究と比しても高い水準にあると思われる。特に、本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべき点は次の通りである。

第一に、これまでの研究は共感性をパーソナリティ特性として理解していたが、本研究では状況的共感性の可能性を探るべき、実験的に共感性を喚起することにより、功利主義的判断への影響を検討しており、この点が独創的であり、評価に値する。

第二に、共感性の裏である、共感性の欠如に着目し、サイコパシーやアレキサイミアを取り上げることがこれまでの研究にはない視点である。

一方、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 仮説が支持されない場合が目立つが、共感性の測定の妥当性の問題はないのか
- 2) 自他の関与を区別するためのシナリオは、その他の内容による違いもあり、それが原因で差が生じたのではないか
- 3) 共感性のタイプの区別がわかりづらく、それぞれの特徴をより明確化すべき
- 4) 共感性とされているのは、視点取得の能力ではないか
- 5) ジレンマ・シナリオに登場する「犠牲者」を日本人と外国人を区別した必然性が理解しにくい。本研究は人種偏見をトピックとしていない印象である
- 6) 道徳的ジレンマにされている状況は非現実的で、日常の域からかけ離れている。このことが対象者の反応に影響がないのか
- 7) 概念定義が不十分で、より詳しく説明する必要がある
- 8) ジレンマ・シナリオの登場人物に対する記述がステレオタイプ的な内容になっていて、体型による偏見を助長するのではないか

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。